

〔学術論文〕

幼児の保護者に対する食教育についての意識調査

A Survey of Guardians of Infants about Food Education

有賀 克明¹、阪野 朋子²

Katsuaki Aruga, Tomoko Banno

1. はじめに

乳幼児期から学童期、思春期までの食生活は、健全な発育のためだけでなく、食行動の基礎形成期であり、成人期の食行動、食習慣に大きな影響を与える。そのため、この時期に適正な食行動の基礎的習慣を獲得することが、その後の疾病予防と健康増進の点から重要であると指摘されている¹⁾。しかし、子どもをとりまく食環境の変化は著しく、不規則な生活リズム、肥満や痩せ、小児生活習慣病の増加、家族とのコミュニケーション不足などが問題となり、その課題は多様化、深刻化している²⁾。

平成17年の食育基本法施行以降、全国各地で子どもたちへの様々な食育活動が展開されており、実践活動の場では、制度的にも食育の推進が明確になってきている。例えば、保育所においては、平成21年から施行された新保育所保育指針の中で「健康な生活の基本としての食を営む力の育成に向け、その基礎を培う」ことを目標とし、保育の一環として位置づけられている³⁾。平成20年告示の幼稚園教育要領にも「先生や友達と食べることを楽しむ」ことを目的とし、共食の喜びや食べ物への興味を促す内容が記載されている⁴⁾。また、小中学校では平成23年度より施行された新学習指導要領の総則に「学校における食育の推進」が盛り込まれ、家庭科、保健、特別活動などの関連する各教科での食育の記述が具体的に示された⁵⁾。このように、今後も保育、教育機関では、更なる食育の推進が展開されるであろう。食育活動の現場で、より効果的な食育推進の方法を検討していきたい。

これまでに、著者は子どもへの効果的な栄養教育についての研究を行ってきた。中学生では日常生活において家庭から独立し親への依存度も低下する時期であり、小学生から中学生へと成長する際に食に対する行動変容が大きいきちんが分かり、小学校高学年では自己の食生活上の問題点を理解することができると示された⁶⁾。また、家庭科教育の実践プログラム(調理実習)と相まって自分で作ることでできる朝食の献立作成および調理能力を持つことも示され⁷⁾、子どもに対して行う食教育としては小学校高学年という時期は適していると考えている。しかし、小学校の現

1 名古屋市立大学名誉教授

2 名古屋女子大学短期大学部生活学科

場教員が抱える問題点として、食生活に無関心な保護者や家庭での食事に要する時間が10分程度である児童が存在することが分かっており、事実、児童への調査結果からも朝食を食べない理由として、「食事が無い」といった答えが挙がった⁶⁾。教育現場での子どもに対する食教育と併せて、そのような無関心な保護者への食教育の必要性を感じている。

家庭は、食とかかわる最も中心的な場であり、食育についても、本来は家庭において育まれるものである。しかし、家族員の減少、関わり合う機会や会話の減少、家族内および地域内のつながりの希薄化などが指摘される中で、子育てや子どもとのかかわりに悩みや不安を持つ親が増えており、家庭の教育力が低下しているとも言える。いくら教育機関や地域社会で素晴らしい食育活動が実践されていても食生活が行われるのは家庭内である。子どもたち、特に乳幼児はその生活を保護者に全面的に委ねている状況であり、保護者への教育をしていかなければ効果期待は薄くなると考えている。平成23年から5年間を対象として開始された第二次食育推進基本計画においても、新たに定められた3つの重点課題の中に家庭における共食を通じた子どもへの食育の推進が明記されている⁸⁾。そこで、本研究では家庭内の食教育力向上を目的とした。保護者に対する効果的な食教育検討のための基礎資料とするため、現代の保護者の食教育に対する考え方や生活上で困っている事を調査した。また、教育現場の声も併せて報告する。

2. 方 法

(1) 調査対象者と調査時期

愛知県N市の私立幼稚園に在籍する園児の保護者を対象に質問紙調査を実施した。幼稚園の許可を得て、園からのお便りとして配布し、家庭で記入してもらい、後日、園への提出物として回収した。770部を配布し、631部を回収した（回収率81.9%）。そのほとんどが母親の回答であったこともあり、今回は母親の食教育についての意識が家庭内の食生活や子どもへどのように影響するかを調べるため、本研究では母親が回答した614部を分析対象とした（有効回答率79.7%）。また、幼稚園に勤務する教職員を対象に質問紙調査を行った。45部を配布し、41部を回収した（回収率91.1%）。調査は2012年1月中旬から下旬に実施した。

保護者および教職員に配布した質問紙に研究内容の目的を提示し、調査協力は任意、無記名であること、個人は特定されず対象者に不利益を与えないことなどを記載し、質問紙の回答をもって、同意を得た。

この調査は、名古屋市立大学研究倫理委員会の承認を受けて実施した。

(2) 調査内容

1) 保護者の質問紙

保護者への質問は、表1に示すように属性に関する5項目、食教育に関する4項目、食事観・

家庭の食環境に関する15項目、子どもの様子に関する7項目からなっている。質問の回答方法は、属性、食教育に関する項目を除き、5件法で回答を求めた。分析に際し、「全く当てはまらない（全く重視しない）」1点から「非常に当てはまる（非常に重視する）」5点と得点化し、集計した。従って、否定的な質問に関しては、「全く当てはまらない」に5点と得点化したので、結果を表示する際には、質問文を肯定文へと変換した。

2) 教職員への質問紙

教職員への質問は、表1に示すように属性に関する6項目、子どもの様子に関する8項目、食教育に関する2項目からなっている。子どもの様子に関する項目は、5件法で回答を求めた。分析に際し、「全く当てはまらない」1点から「非常に当てはまる」5点と得点化し、集計した。従って、否定的な質問に関しては、「全く当てはまらない」に5点と得点化したので、結果を表示する際には、質問文を肯定文へと変換した。

(3) 分析方法

統計処理はエクセル統計アドインソフトStatcel3（オーエムエス出版）を用いた。得られた結果はt検定を行い、統計的有意水準は5%とした。

3. 結果および考察

(1) 母親の属性および食教育に対する考え方

母親の年齢構成は、20歳代3.7%、30歳代72.5%、40歳代18.7%、未記入5.1%であった。母親の職業は、専業主婦70.7%、パート勤務22.1%、常勤2.3%、自営業4.1%、未記入0.8%であった。本研究では、調査対象を幼児の保護者とし、調査機関は幼稚園であった。調査用紙の内容は第一子についての回答を求めたため、7割の母親は20歳代後半から30歳代前半に出産していることが分かった。また、幼稚園は、労働などの理由がないと入所できない保育所と所轄も保育内容も異なる。保育時間も短いことから、専業主婦もしくは時間に融通のきくパート勤務の母親が9割であった。木林らは、幼稚園と保育所において園児の食生活習慣について比較した中で、幼稚園の保護者の方が子どもに対する食教育に費やす時間的余裕があることを示している⁹⁾。本研究で調査した食教育に関する質問項目「幼児期のこどもに対しての食教育は大人になってからも役立つと思いますか」の回答は、「非常に思う」296名、「まあ思う」290名と95%の母親が食教育に対して肯定的意見であった。こどもに対しての食教育が必要と答えた母親のみに「幼稚園での食教育が必要だと思いますか」の質問をしたところ、84%の母親が必要と答えた。このことから、幼稚園に子どもを通わせている母親の多くは、子どもに対しての食教育が必要であると考え、教育機関である幼稚園でも食教育をしてほしいと考えていることが示された。しかし、「幼稚園で行

れている食教育の内容を知っていますか（幼稚園での食教育が必要と答えた方のみ）の質問」の回答は、「よく知っている」20名、「まあ知っている」276名であり、認知度としては、59.8%であった。このことから、4割の母親は幼稚園において食教育が必要だと考えているが、そこで実践されている教育内容についてよく知らないという結果が示された。そこで、幼稚園での食教育内容の認知により、家庭での食生活や食教育に活かし、子どもの様子に変化が見られるかどうかを調べようと考え、先ほどの質問で「よく知っている」、「まあ知っている」と答えた296名を認知群、「どちらとも言えない」、「知らない」と答えた201名を非認知群として、以下2群の比較を行った。

(2) 母親の食事観・食環境との関連

母親の食事観・食環境との関連を表2に示した。

表2 母親の食事観、食環境

質問項目	対象者全体 (n=614)	園での食教育内容認知による比較		t検定
		認知群 (n=296)	非認知群 (n=311)	
3食の食事はほぼ決まった時間に行っている	4.31±0.69	4.28±0.75	4.31±0.64	
子どもには栄養士の手作り料理を食べさせたい	4.45±0.68	4.48±0.69	4.45±0.68	
料理をすることに自信がある	3.11±0.98	3.17±0.91	3.10±0.91	
調理済み食品をよく利用しない(※)	3.47±0.93	3.48±0.87	3.61±0.94	
外食が多くない(※)	3.69±0.87	3.74±0.85	3.61±0.91	
食事を進めて家族の絆を深めたい	4.10±0.82	4.17±0.74	4.21±0.76	
食事は子どもの心を育てる場だと考える	4.01±0.78	4.11±0.72	4.07±0.71	
家族がそろって食事をするように努力している	3.89±0.97	3.99±0.91	3.88±0.91	
食事中楽しい会話をしよう努力している	3.79±0.85	3.79±0.83	3.89±0.71	
食事が楽しくなるよう盛り付けや彩りなどを工夫している	3.48±0.90	3.47±0.89	3.67±0.86	
食事中はテレビがついていない(※)	3.08±1.63	3.18±1.57	3.13±1.51	
子どもの食べこぼし、散らかしがあった場合、注意する	3.92±0.93	3.96±0.85	3.87±1.06	
子どもの食べ残しがあった場合、注意する	4.02±0.92	4.13±0.81	3.95±0.96	*
子どもの箸の持ち方が間違っていた場合、注意する	3.81±1.14	3.91±1.06	3.72±1.16	*
子どもが食事中に席を立った場合、注意する	4.69±0.66	4.62±0.67	4.65±0.66	

※ 否定的な質問項目は、分析の際に分かりやすくするために肯定文へと変換した。

* p<0.05

認知群と非認知群とを比較したところ、「子どもの食べ残しがあった場合、注意する」、「子どもの箸の持ち方が間違っていた場合、注意する」の項目で有意差が見られ、どちらも認知群の方が高い得点を示した。この2つの項目は、食事マナーのしつけであり、認知群では非認知群よりも積極的に注意をしていることが伺える。現代では、家族での共食時間が減り、家庭での生活文化の継承がされにくく、家庭で食事マナーを身に付ける機会も少なくなっている¹⁰⁾。古郡らの調査では、大人になってから思い出す食事マナーやしつけは、保育所や幼稚園よりも家庭での印象が強いこと、幼稚園に通園した人の方が、保育所に入所した人に比べ、家庭でのしつけが多かったことを報告している¹¹⁾。本研究では幼稚園での調査であり、母親全体の注意をするというしつけに関する項目は3.8点以上の高い得点を示していた。また、古郡らは大人になった時の食事マナーが身につけている自覚と幼児期の家庭での食事のしつけに関連があると示している¹¹⁾。さらに、箸の持ち方に関しては、2歳から3歳前後で箸を使用することができ、幼児期に箸の持

ち方が出来上がり、10歳前後で固定化されるとされており¹²⁾、正しい箸の持ち方をする者は幼児期に持ち方の指導を受けているとの報告もある¹³⁾。さらに、箸を正しく持つ者は、共食についても意識が高かった¹³⁾。このような報告からも幼児期に正しい箸の持ち方を指導し、習慣化させる必要があると考えられる。保護者に対して、家庭内での指導の重要性を示し、家庭内食教育力が向上するようにしていく必要がある。その中で、幼稚園は保護者に対しての教育機会を設けるなどサポートを行う必要があると考えられる。

その他の項目では、両群の明らかな差は認められなかった。この両群は、幼稚園での食教育に対する意識の違いがあるが、どちらの群も子どもへの食教育に対しては肯定的である。そのため、細かなしつけでは群間による違いが認められたが、家庭内の食生活おける食事観や食環境づくりには、どちらの母親もより良い生活を目指していることが分かった。

(3) 子どもの様子との関連

子どもの様子との関連を表3に示した。

表3 子どもの様子

質問項目	対象者全体 (n=614)	園での食教育内容認知による比較		t検定
		認知群 (n=296)	非認知群 (n=201)	
園での出来事を自らよく話す	3.78±1.03	3.93±0.99	3.63±1.10	**
園での食事(給食)のことを自らよく話す	3.37±1.11	3.62±1.07	3.29±1.13	*
食事を楽しみにしている	3.83±1.03	3.94±1.02	3.79±1.02	
料理をしたがる	3.99±1.01	4.04±0.97	4.11±1.03	
食卓の真ん中に一緒に行きたがる	3.64±1.13	3.66±1.15	3.69±1.20	
食卓に対して好き嫌いが無い(※)	2.46±1.33	2.62±1.43	2.44±1.19	
食事中に席を立たない(※)	3.27±1.33	3.32±1.33	3.19±1.33	

※ 否定的な質問項目は、分析の際に分かりやすくするために肯定文へと変換した。
* $p<0.05$, ** $p<0.01$

母親全体の結果を見ると、好き嫌いが無いや食事中に席を立たないという項目（否定的な質問を肯定文に変換）は、他の質問項目の点数と比べて低かった。子どもの偏食や遊び食いは、厚生労働省が行っている乳幼児栄養調査の結果でも保護者が幼児の食事で困っていることの上位に挙げられ¹⁴⁾、本研究の対象者の子どもにおいても子どもの好き嫌いや遊び食いが見られることが示された。特に好き嫌いが無いの項目では、全く当てはまらない150名、やや当てはまらない1236名を合わせると6割の子どもに好き嫌いがあると答えている。本研究の結果からは困っているか、また偏食原因の食べ物とは明らかではないが、半数以上の子どもが好き嫌いを示している。しかし、子どもの発達の間からは自我の発達であり、好き・嫌いと自己主張ができるようになったとも考えられる。食べ物を好きになる、食べられるようになるには、経験の積み重ねが必要である。また、子どもの偏食は固定されたものではなく、気持ちで食べている部分も多いので、家庭や社会で様々な食経験をさせることが重要である¹⁵⁾¹⁶⁾。しかし、近年、子どもの好き嫌いに対して、嫌がるものを食卓に出さない、自分のストレスになるから子どもが食べ物を好きになるような工夫

をしない親が多くなったというデータもある¹⁷⁾。その親からは、「幼稚園（小学校）に入ったら、食べさせてくれる」、「幼稚園（小学校）では食べているだろうから、家では食べなくていい」という意見も出されていた¹⁷⁾。このようなデータからも家庭内の食教育力の低下が推測される現代では、教育機関での食経験が重要であると共に、今後は保護者に対しても子どもの自我発達に関する知識や偏食改善の調理工夫などのアドバイスが必要であると考えられる。

各項目の平均点を認知群、非認知群で比較すると、「料理をしたがる」以外項目で認知群の方が高い得点であった。「園での出来事を自ら話す」、「園での食事（給食）のことを自らよく話す」の項目で、非認知群に比べ認知群で有意な差が見られた。このことから、認知群の子どもは自ら母親に話し、その結果として母親が園での食教育内容を知ることにつながったと考えられる。先の母親の食事観・食環境の結果では、共食や楽しい会話努力、食事中テレビの有無に両群の差は見られなかったため、食事場面に両群の差は見られず、同じような環境であることが分かる。しかし、子ども自ら話をするという状況に視点を当てて、子どもの発言力や母子関係から考察してみると、特に母親の意識・態度は子どもが親と心理的な結びつきを感じ、子どもの食事や料理への興味につながるとの報告^{18) 19)}もあることから、子どもが母親との関係が深いと感じれば、コミュニケーションの頻度も高くなり、自らの発言も増え、良い母子関係、食環境を作ることができる。その関係性の構築は、母親の態度である。本研究でも母親の食教育やしつけに対する積極性が子どもの自ら話をする様子につながったのではないかと考えている。しかし、子どもの他の様子には差が見られなかったことと基本的に今回の対象者は食教育に対して時間的ゆとりのある母親であったことを考えても、今後さらに様々な家庭環境の対象者について検討していく必要があることが示された。

(4) 母親が子どもへの食教育として幼稚園に求めること

幼稚園での食教育が必要だと回答した497名に対して、子どもの食教育として幼稚園に求めることを自由記述で回答してもらった。記述内容で多数回答されたキーワード（満足、マナー、感謝の心、好き嫌い、栄養バランス）と行事など具体的要望の書かれた回答を集計した。その結果を表4に示す。

満足という回答数は少なかったが、認知群で13.9%、非認知群で4.5%であり、認知群で高い結果が得られた。その他のキーワードでは両群共に同程度の回答数であった。自由記述の中で最も回答数が多かったのは、幼稚園に対しての具体的な要望であった。主なものは、食べ物の栽培から収穫、調理までの一連の取り組み、クッキング保育のような行事を設ける（増やす）、給食で摂れる栄養や食材・レシピを知りたい、給食内容の不満（味が濃い、メニュー数など）の改善、専門家による教育、食教育内容を知りたいが挙げられていた。このような結果から、教育機関での食教育に大きな期待を寄せていることが伺える。よって、幼稚園が実施している食教育内容の

表4 子どもへの食教育として幼稚園に求めること

	認知群 (n = 296)		非認知群 (n = 201)	
	回答数	%	回答数	%
満足	41	13.9	9	4.5
マナー	20	6.8	20	10.0
感謝の心	35	11.8	19	9.5
好き嫌い	33	11.1	31	15.4
栄養バランス	48	16.2	33	16.4
要望	54	18.2	39	19.4

情報を提供することにより、保護者の要望に応えることができると共に、家庭内の食生活に反映させることができるのではないかと考えている。

(5) 幼稚園教職員の属性および教員から見た子どもの様子、食教育上困っていること

幼稚園教員の年齢構成は、20歳代78.0%、30歳代14.6%、50歳代2.4%、60歳代4.9%であり、95.1%が女性であった。結婚していると答えた人数は9名、子どもがいると答えた人数は7名であった。本調査は3つの幼稚園の教員に対して行ったが、どの園も保護者よりも低年齢の教員が多いことが分かった。勤務年数が10年未満の教員も31名であった。

教員から見た子どもの様子を図1に示した。

非常に当てはまる、やや当てはまるの回答を合わせると好き嫌いと完食に関する項目以外は全て80%を超えていた。「好き嫌いがある子どもが少ない」の項目では、ほぼ半数の教職員が子どもたちの好き嫌いを感じていることが分かった。その好き嫌いによって完食できない子どもがいると考えられる。

調査対象の幼稚園では、給食を提供している。給食時間中に困っている事（複数回答可）を集

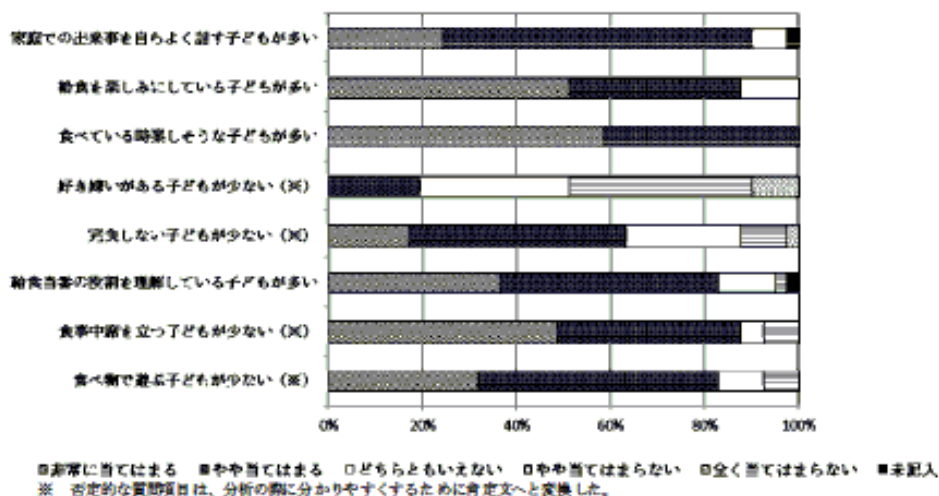


図1 教職員から見た園児の様子

表5 給食時間中に困っている事 計した結果を表5に示した。

順位	困り事	回答数
1	好き嫌い	14
	食べ散らかし	14
3	少食	9
4	給食が残る	5
5	遊び食べ	4
	給食が足りない	4
7	時間が足りない	0
	メニューが少ない	0

一番困っている事は、子どもの食べ物に対する好き嫌い、食べ散らかしであった。少食、給食が残ることも食べ物を大切にするという教育上困っているようである。しかし、給食が足りないという意見もあった。担当するクラスにより、幼児の成長や喫食量も異なるが、今回の調査では、担当クラスと給食の充足・不足感との関連は見られなかった。また、時間が足りない、メニューが少ないといった意見は

なく、保育時間中に行う食事時間や給食内容に対しては問題を感じていないことが分かった。食教育を行う上で困っていることの自由記述回答は、そのほとんどが好き嫌いへの教育方法と家庭に対しての要望であったため、同様の意見をまとめてその一部を図2に示した。好き嫌いに関しては、前述のとおり、自我意識を持つ幼児期に多い困り事である¹⁴⁾¹⁵⁾¹⁶⁾。母親と同様、現場教職員も感じており、食教育上困っていることが明らかとなった。また、その好き嫌いは家庭の協力と共に子どもの食体験を積み重ね、好き嫌い改善を目指したいとの意見が出された。しかし、入園までの家庭内食体験が乏しいとの意見や先の母親が幼稚園に求めることの回答からも、幼稚園への教育期待が大きいと感じられる。今後、幼稚園での食教育充実はもちろんのこと、保護者に対して家庭教育の重要性を示していくことが必要である。併せて、家庭教育には、保護者自身に望ましい食生活についての知識が必要となるため、保護者に対しての教育も行っていかなければならないと考えている。幼稚園と家庭での食教育を充実させていくためには、幼稚園と家庭との連携方法を検討しなければ、協力体制を築くことができないと感じられる。先にも述べたが、幼稚園の食教育内容や保護者の知りたいことの情報が幼稚園から提供されることは、家庭との連携方法の一つとなるのではないかと考えている。今後、幼稚園からの配布物の情報なども調査し、家庭内の食教育に反映させられるよう検討していきたい。

給食の食べ残しがほとんど食べられない子がいる。
園と家庭の食事に対する園児の意識の差を保護者に理解してもらうのが難しい。
食わず嫌いの子が多い。時間がかかってしまう。
箸を落とす子が多い。
子どもたちの問題（アレルギーなど）のため、一言にできる食育活動が難しい。
入園までに自分で食事ができることが望ましい。好き嫌いは家庭でなくすようにしてもらいたい。
好き嫌いに対しての教育を行っているが、家庭でも同じ教え方が必要。
家庭の協力がなければ難しい。
入園までの家庭の食の楽しさ。

図2 園児に対し食教育を行う上で困っていること（自由記述、一部抜粋）

4.まとめ

本研究では、家庭内の食教育力向上を目的とし、保護者に対する効果的な食教育の基礎資料とするため、現代の保護者の食教育に対する考え方や食生活上で困っている事を調査した。

その結果、子どもを幼稚園に通わせている母親の95%が子どものころからの食教育について肯定的意見であり、幼稚園での食教育も8割が必要であると答えた。現在、各幼稚園では、様々な食育活動が実践されているが、その認知度は6割程度であり、4割の母親は幼稚園での教育が必要だと考えているが、どんな教育かを知らないことが明らかとなった。母親の食事観や家庭の食環境について、教育認知との関連を調べたところ、子どもの食べ残しや箸の持ち方に対する注意で差が見られ、認知群では食事マナーに関する項目で積極的に注意していることが伺えた。また、子どもの様子では、園での出来事や給食の事を自ら話すという項目で非認知群に比べ認知群で高い点数であったため、認知群では子どもの話から園での教育内容を認知していることが推察された。全体の結果から、子どもの食べ物に対する好き嫌いを感じている母親が多く見られた。子どもの好き嫌いに関しては、現場教職員の困りごととしても挙げられ、現場と家庭での食生活上で困っていることが明らかとなった。また、幼稚園で行われている食教育に対して、非認知群に比べて認知群の方が満足の回答数が多かったが、比率は低かった。さらに、幼稚園に対しての要望が多く挙げられたことから教育機関への期待が大きいことが推察された。それに対して、教職員からは、子どもへの食教育は家庭の協力が必要との意見が出された。

以上の結果から、幼児期の子どもは、母親は、子どもの食教育について必要であると考えていること、食生活上子どもの食べ物の好き嫌いに対して困っていることが明らかとなった。教育機関に求めることも多い反面、幼稚園での実践内容が家庭に伝わっていないという教育機関と家庭のずれが見られたため、今後、より一層家庭と教育機関との連携体制を築き、現場教職員も保護者も抱えている子どもの好き嫌いに対しての取り組み方を一緒に検討していく機会を作ることが期待される。本研究では、教育という視点から幼稚園を対象に調査を行ったが、今後は様々な家庭環境について検討し、家庭内教育力の向上、子どもたちの食環境改善を目指したい。

謝辞

本研究に際し、調査にご協力いただいた幼稚園の教職員および保護者の皆様、データ解析にご協力いただいた名古屋女子大学伊藤ゆりえさんに厚く御礼申し上げます。

参考文献

- 1) 後藤美代子, 鈴木道子, 佐藤玲子, 鎌田久仁子, 阿部由希: 保育園児の食生活に対する保護者の関わり, 日本食生活学会誌, 17, 336-341 (2007)
- 2) 富岡文枝: 幼児への食教育と両親の食意識及び食行動との関わり, 栄養学雑誌, 57, 25-36 (1999)
- 3) 厚生労働省: 保育所保育指針 (2008)

- 4) 文部科学省：幼稚園教育要領(2008)
- 5) 文部科学省：小学校学習指導要領(2008)
- 6) 川田由香, 阪野朋子, 丸山智美：小学生における食習慣について - 思春期の栄養教育についての一考察 -, 金城学院大学消費生活科学研究所紀要, 11, 41-49 (2006)
- 7) 太田貴子, 阪野朋子, 川田由香, 佐喜真未帆, 丸山智美：思春期における効果的な食育展開のための基礎研究 - 学童期の調理技術からみた献立の検討 -, 金城学院大学論集 自然科学編, 5, 9-16 (2009)
- 8) 内閣府：第2次食育推進基本計画(2011)
- 9) 木林悦子, 上野恭裕, 西谷香苗：幼稚園・保育所における園児の食・生活習慣についての比較研究, 園田学園女子大学論文集, 43, 85-101 (2009)
- 10) 岩村暢子：変わる家族 変わる食卓 - 真実に破壊されるマーケティング常識, 勁草書房, 68-117 (2003)
- 11) 古郡曜子, 菊池和美：保育所・幼稚園における食の思い出調査 - 家庭でのしつけとの関連をふまえて -, 日本調理科学会誌, 42, 410-416 (2009)
- 12) 向井由紀子, 橋本慶子：箸の使い勝手について - 箸の持ち方 -, 日本家政学会誌, 29, 457-466 (1978)
- 13) 山内知子, 小出あつみ, 山本淳子, 大羽和子：食育の観点からみた箸の持ち方と食事マナー, 日本調理科学会誌, 43, 260-264 (2010)
- 14) 厚生労働省：平成17年度乳幼児栄養調査(2005)
- 15) 今田純雄：食べることの心理学 - 食べる、食べない、好き、嫌い, 有斐閣選書, 63-91 (2005)
- 16) 池本真二, 稲山貴代：食事と健康の科学 - 食べること < 食育 > を考える, 建帛社, 108-109 (2006)
- 17) 岩村暢子：家族の勝手にしょ！写真274枚で見る食卓の喜劇, 新潮社, 96-99 (2010)
- 18) 平井滋野, 岡本祐子：小学生の父親および母親との心理的結合性と家庭における食事場面の諸要因の関連, 日本家政学会誌, 56, 273-282 (2005)
- 19) 高畑彩友美, 富田圭子, 饗庭照美, 大谷貴美子：母親の食生活に対する意識や生活充実感が幼稚園に通う子どもとのコミュニケーション頻度に与える影響, 日本家政学会誌, 57, 287-299 (2006)

